

# アラン・コルバン著 『快樂の調和』 より (1)

—序と第一章—

尾 河 直 哉

Traduction japonaise de *L'harmonie des plaisirs* d'Alain Corbin (1)

NAOYA OGAWA

キーワード

フランス近代史 (histoire moderne française) 、感性の歴史学 (histoire du sensible) 、性科学 (sexologie) 、アナール学派 (Annales) 、アラン・コルバン (Alain Corbin)

はじめに

一、本書について

これから数回にわたって分載するのはAlain Corbinの最新刊(コルバンの著作を参照)『*L'harmonie des plaisirs. Les manières de jour du siècle des Lumières à l'avènement de la sexologie*』 Perrin, 2008.の全訳である。本書は『快樂の歴史』の邦題のもと藤原書店

より刊行予定だが、それに先立ちここに訳出を試みたい。

感性の歴史家として、また売春の歴史にかんする浩瀚な書物(『娼婦』)をもした歴史家として、性をめぐる感性の歴史は避けて通れない主題だが、性という主題はたいへん難しい。あるインタビュ어의なかでコルバン自身が「確かに、性にかんする感受性の歴史は天気にたいする感受性の歴史よりもずっと難しい。天気の感受性ははるかに口にしやすいですから」と述べている(「イザベル・フランドロフ編、尾河直哉訳、『アナール』とは何か』藤原書店、二〇〇三年、二八九頁)。コルバンは性医学の資料に依拠することで、性と快樂をめぐるとこの困難な感性の歴史に挑んだ。『身体の歴史』はコルバンが構想から十年をかけて完成した記念碑的著作だが、その第二巻をコルバン自身が監修しており、本書はその監修作業の副産物であると推測できる。分量からしても『娼婦』や『海辺の誕生』に匹敵す

る。コルバンの主著のひとつと言っても過言ではなからう。

## 二、アラン・コルバンについて

事件史中心の旧来の歴史認識に対抗して、事象を超えた歴史の構造や律動を全体的に捉えようとする新しい歴史学研究はアンリ・ベール (Henri Berre, 1863-1954) とともに胎動を開始し、リュシアン・フェーヴル (Lucien Febvre, 1878-1956) とマルク・ブロック (Marc Bloch, 1886-1944) とともに「アナール学派」として一家を成した。これを一大学派へと発展させたのがフェルナン・ブローデル (Fernand Braudel, 1902-1985) である。ところで、現在まで続くこのアナール学派を概観してみるとたつたつの傾向があることに気づく。ひとつはフランソワ・シミアンの衣鉢を継ぎ、数量と時系列によつてあらかじめなる歴史の律動と時間性を基礎にした歴史学の傾向で、この傾向は、フェルナン・ブローデル、ピエール・ショニーニユ (Pierre Chaunu, 1923)、『エマニユエル・ル＝ロワ・ラデュリ (Emmanuel Le Roy Ladurie, 1929) の仕事にその流れを辿ることがある。一方、アンリ・ベールの歴史心理学的な見地に立った歴史認識の傾向はリュシアン・フェーヴル (Lucien Febvre, 1878-1956) やジョルジュ・デュビー (Georges Duby, 1919-1996) へと引き継がれる心性史へと発展した。その心性史の源流に位置するのが、任意の人間集団における世界の表象を扱う文化史である。この文化史の最も豊かな到達点のひとつが感性の歴史学であることは、今や疑いを容れないであろう。この感性の歴史学を現在大胆に押し進めているのが本書の著者アラシ・コルバンである。

## 三、コルバンの著作

*Prelude au Front populaire. Contribution à l'histoire de l'opinion*

*publique dans le département de la Haute-Vienne (1934-1936),*  
thèse de 3<sup>e</sup> cycle, Méry, Limoges, 1968, 340p.

*Archaïsme et modernité en Limousin au XIX<sup>e</sup> siècle, Tome 1 :  
La Rigidité des structures économiques, sociales et mentales.*

*Tome 2 : La naissance d'une tradition de gauche, Marcel  
Rivière, Paris, 1975, 1148p. Réédition préfacée, Presses  
universitaires de Limoges, Limoges, 1999*

*Les Filles de noce. Misère sexuelle et prostitution au XIX<sup>e</sup>  
siècle, Aubier, Paris, 1978, et édition abrégée, Flammarion,  
« Champs », Paris, 1982. (『娼婦』 杉村和子監訳、藤原書店  
一九九一年)*

*Le Miasme et la Jonquille. L'odorat et l'imaginaire social (XVIII<sup>e</sup>-  
XIX<sup>e</sup> siècles), Aubier, Paris, 1982, et Flammarion, « Champs »,  
Paris, 1986. (『におひの歴史——嗅覚と社会的想像力』 山田登  
世子・鹿島茂訳、藤原書店、一九九〇年)*

*Le Territoire du vide. L'Occident et le désir du ritage (1750-1840),  
Aubier, Paris, 1982, Flammarion, « Champs », Paris, 1986. (『海  
辺の誕生』 福井和美訳、藤原書店、一九九二年)*

*Le Village des cannibales, Aubier, Paris, 1991, Flammarion,  
« Champs », Paris, 1995. (『人食いの村』 石井洋二郎・石井啓  
子訳、藤原書店、一九九七年)*

*Le Temps, le Désir et l'Horreur, Aubier, Paris, 1991, et Flammarion,  
« Champs », Paris, 1998. (『時間・欲望・恐怖——歴史学と感  
覚の人類学』 小倉孝誠・野村正人・小倉和子訳、藤原書店、一  
九九三年)*

*Les Cloches de la terre. Paysage sonore et culture sensible dans  
les campagnes au XIX<sup>e</sup> siècle, Albain Michel, Paris, 1994, et  
Flammarion, « Champs », Paris, 2000 (『音の風景』 小倉孝誠  
訳、藤原書店、一九九七年)*

*L'Avènement des loisirs (1850-1960)*, Aubier, Paris, 1995, et Flammariion, « Champs », Paris, 2001. (『ランチャーの誕生』渡辺響子訳、藤原書店、二〇〇〇年)

*L'Histoire des sensibilités : Lucien Febvre, Georges Duby, Alain Corbin*, Fujiwara, Tokyo, 1997. (『感性の歴史』小倉孝誠編集、大久保保明・坂口哲啓訳、藤原書店、一九九七年)

*Le Monde retrouvé de Louis-François Pinagot. Sur les traces d'un inconnu (1798-1876)*, Flammariion, « Champs », Paris, 1998. (『記録を残さなかった男の歴史——ある木靴職人の世界 1798-1876』渡辺響子訳、藤原書店、一九九九年)

*Histoire du sensible* (entretien avec Gilles Heuré), Découverte & Syros, Paris, 2000. (『感性の歴史家』小倉和子訳、藤原書店、二〇〇一年)

*L'homme dans le paysage* (entretien avec Jean Lebrun), Gallimard, « Textuel », Paris, 2001. (『風景と人間』小倉孝誠訳、藤原書店、二〇〇二年)

*Le ciel et la mer*, Bayard, Paris, 2005. (『空と海』小倉孝誠訳、藤原書店、二〇〇七年)

*Histoire du corps* (dir. avec Jean-Jacques Courtine et Georges Vigarello), Seuil, « L'Univers historique », Paris, 3 vol., 2005-2006. (『身体の歴史I——16-18世紀ルネサンスから啓蒙時代まで』鷺見洋一監訳、藤原書店、二〇一〇年。『身体の歴史II——19世紀フランス革命から第一次世界大戦まで』および『身体の歴史III——20世紀まなごしの変容』は藤原書店近刊)

*Histoire du christianisme. Pour mieux comprendre notre temps* (direction), Seuil, « L'Univers historique », Paris, 2007. (『キリスト教の歴史』浜名優美監訳、藤原書店、二〇一〇年)

*L'harmonie des plaisirs. Les manières de jouir du siècle des Lumières à l'avènement de la sexologie*, Perrin, 2008. (本書)

## 翻訳

アラン・コルバン著

## 快樂の調和

— 性科学の誕生を迎え、

啓蒙の世紀はいかなる快樂を享受したか —

## 序

### 熱・忘我・錯乱

まず『売春宿の子』のエピソードをいくつか読んでみよう。ピゴールブランの作とされる一八〇三年の作品である。

脱獄したテオドルが尻軽女優S：嬢の家に逃げ込んで女主人といちやついているところに、男を追いかけた看守たちがむりやり扉を開けさせる。

「どうしろってんだ。他にしようがあるかって。ほんと、気が変になりそうだったぜ。恋人の腕のなかでしか正気失ったことがないS：嬢がよ、どうしようもなくて、おれをベッドに押し倒すと全身でおっかぶさってきやがった。おれの足は枕の上だから、顔がちよどあいつの股のあいだよ」と若者が報告する。

「『主人さまはご病気ですという召使いの言葉も聞かずに、鬼看守どもS：嬢の部屋に入ってきてあちこちを搜索し始めた。ところが、あんまりそられる体位だったから、おれとしちゃチャンスを見逃すわけにいかなくてよ。やばいたわかってたけど、ふたりであんなに楽しい歓迎パーティーやったばっかの愛の小部屋に、舌

を差し入れようってがんばった。S:嬢も欲びの瞬間をみすみすふいにできなくてさ、危ないたあわかつてもおれの欲望に身を捧げちゃったわけ。で、さんさんあちこちつつきまわったサン＝ラザールの手先から、お嬢さん脱獄囚を知りませんかって聞かれたとき、あの娘、あんまり支離滅裂でわけのわからない返事するもんだから、気がつかなくったんだな、やつら。あれが病気なんかじゃなくて、いっちゃってたからだってこと。で、奴さんたち退却さ  
「:」<sup>1</sup>

ひそかに快感でめちやくちやにされたヒロインは他人の眼前で混乱状態を呈するが、それを観ている方は、熱病の症状で頭がおかしくなったのだと解釈するのである。

この少しまえ、テオドールはおぼこ娘セシルと逢い引きをしていた。快樂とはどんなものか知りたくてたまらないセシルは「通りか  
ら目に付かないよう部屋の隅に隠れると、椅子の端に膝をついて上体を前に倒し、狂喜するテオドールに下半身を預け」、一方そのテオドールは「若い美しい娘の透き通るような白い尻のあいだから見え隠れする黒々と苔蒸した日陰の美しい洞窟<sup>2</sup>」を発見して目を輝かせる。

と、そこにミサから帰ってきた家政婦の老ジュヌヴィエヴの声  
が聞こえてきて、セシルは激しい恐怖を覚える。家政婦が家に入っ  
てこようとするとそのとき、セシルはスカートを下ろすと愛  
人の中に閉じこめる。「ジュヌヴィエヴは店舗の奥の部屋に入っ  
てくると、椅子のうえに跪いているセシルの姿を目にする。セシ  
ルは態勢を立て直すことができないう。ところが、セシルがお  
祈りをあげていると勘違いしたジュヌヴィエヴが、『まあ、お嬢  
さま』ともぐもぐ言う:『天使のように清らかで:さあさ、そのま  
まお続けになって:天国への道を行んでいらしゃいますよ。けっし  
てその道から外れないように』『ええ。ばあや』と、美しいセシル  
は欲びに失神しそうになりながら言う。『お嬢さま、そのまま動か

ずに。あたしは教会に戻ってお祈りの続きをしますから。でも  
なんです、あたしのお祈りなんかあなたの役にも立ちませぬわね。  
お嬢さまのような激しい「挿入された」の意がある」調子のお祈りを  
見てると思いますもの。あたしはここまで熱くなれないって」そう  
言つて老ジュヌヴィエヴは足をひきずりながら慈悲深い神のここ  
ろへと戻つてゆく「:」

「この会話のあいだテオドールはなにをしていたのか? 「:」  
われ知らず舌を(セシルの「ひだひだのある宝石」に)入れようと  
していたのである。「:」セシルは舌をそこに入れてもらう方法を  
すで見つけていた「:」ジュヌヴィエヴが信仰心の高揚と勘違  
いしたあの混乱をセシルの官能に惹起したのが舌のこのくすぐるよ  
うな素早い動きだった」<sup>3</sup>

ここでもまた目撃者は大きな勘違いを犯している。若い生娘の跪  
いた姿勢。偽りの熱っぽさ。生娘の信仰心を疑わない家政婦。罪を  
許す慈悲深い神の暗示。こうしたものがエロチックな挿話を偽りの  
宗教儀式へと変換している。セシルが「天国への道」を歩んでい  
て、「激しい「挿入された」調子」の祈りを捧げているという言い方  
をすることによって、信仰心からそうなっていると老女が思い込ん  
だ乱れと、クリトリスへの愛撫により惹起されたこらえきれない動  
揺とのあいだに起こった取り違いを強調しているのである。

「ある朝、D:Y夫人の寝室にいたただけどな」と、そのしば  
らくして、売春宿に身を落ち着けたテオドールは打ち明け話をす  
る。「フェリシテが入ってきてそつと扉を閉めた「:」D:Y夫人  
のベッドに入ると夫人に接吻して、内々で話したいことがあるんだ  
けどって言ってさ「:」それからカーテンを引いて、上半身をア  
ルコーヴの方に向けたんだけど、お尻はこちに向いてるわけよ。  
しかもカーテンはご丁寧にならうど胸のところを交差してる。そし  
たら、前もって仕掛けといったのか、ペチコートがするするつと足許  
に落ちちゃってさ「:」これ見ちゃつたらおれはもうカーツとき

ちやって、神々しい尻のみまえに進み出るとそつと跪いてよ「……」おれのみだらな舌がそんなかに入ってって、官能で熱くなった蜜を吸い出したってわけ。

そのうちやる気まんまんになっちゃって、固くなった槍を魅惑の洞穴めがけてぶつ込んだ。舌いれて唾たっぷりつけておいたから、なんなく入ったよ。これまで生きてきて、あんな恍惚味だったことないと思うぜ「……」それでも、おれの方はかなり自分を抑えられたから、身体のかなかに隠しているもの外に漏らすなんてへましなかつたけど、フェリシテはそんなわけにいかなくさ、相変わらずD……Y夫人と喋りながら、絶頂の瞬間にはあきららかにおかしくなつてたから、D……Y夫人が笑って訊くわけ。あなた気が変なんじゃないのつて。フェリシテは返事をするかわりに唇を恋敵の唇におしつけてさ、相手の注意を逸らすために愛撫し始めた。こんな攻撃受けて逆らえる夫人じゃないから、すつかりのめりこんじゃつてさ。で、おれたち三人、ほとんど同時にいっちゃつたわけよ。いけるところまで。

「……」フェリシテはまたD……Y夫人話を始めたんだけど、夫人が最後に言うのが聞こえたよ。『ああ、あなたつてほんと好きものね！』<sup>(4)</sup>

結局ここでもまた誤解なのだが、しかし、こんどのばあい、解釈は錯乱を参照している。場面の熱狂的な性格の原因は、過剰な好色、レズビアニズム的欲望の烈しき、そのレズビアニズムの充足のためと勘違いされた猥褻行為へと帰されている。三人で快楽を味わうこと。同時に気をやること。これらはいずれもポルノ小説の紋切り型的構成要素である。先のふたつの例と同じように性的快楽を感じる女性の身体はふたつに分断されている。男の愛撫に委ねられた尻と女陰が感じる快楽は、性器を通して喉や顔に昇ってゆき、ついには叫び声、顔の表情、言語の混乱を抑えることができなくなるのである。

尻軽女であれ、処女であれ、娼婦であれ、真実を語る女性の下半身が強烈な快感を感じると、上半身はそれを隠すことができずに偽装へと変換する。以上に引いた三つの場面はいずれも官能文学のうちひとつの紋切り型を採用している点で一致しているが、それは公的なものと私的なものの峻別を目に見える形にするという紋切り型である。妻は、窓に肘をついて通りを眺め、不意に帰宅しないともかぎらない夫を見張る一方で、カーテンでしつかり隠した剥き出しの下半身を熱く燃える愛人に委ねる。

引用した三つの挿話において、男は黙々とつらい使命を遂行している。男の役どころとはどうやら、差し迫った危険、それに対する巧みな回避策、見る者の勘違いによっていっそう先鋭化する快感をパートナーに与えることだけのようである。三人の女性はオルガスムを隠さないが——隠すことなどできないのは明らかだ——それがオルガスムであることを察知されてはまずい状況を設定している。官能文学の歴史においてこの手法は新しいものではなく、タルマン・デ・レオーの『小伝集』(執筆は一六五七年)がすでに用いている。

場面の目撃者たちが陥る読み違いは、手許にあつて自由に扱うことのできる三つの解釈モデル、すなわち熱<sup>フレイグ</sup>、忘我<sup>エニグマ</sup>、錯乱<sup>エニグマ</sup>に関わっている。かくして『売春宿の子』は、当時の「性生活」を理解しようとするときにわれわれが辿るべき三つの道を指し示してくれている。医学、道徳神学、ポルノグラフィがそれである。

こうした幕間狂言を読むと、われわれは未知の土地の探検へと誘われる。すなわち、心理的な時代錯誤を避けつつ包括的な視線でものを見る歴史人類学の手続きを採用するよう誘われるのである。系譜学的方法に正統性がないわけではないが、この方法には頼らず、われわれの信念、信憑、経験<sup>エニグマ</sup>を忘れ、事後に練り上げられた概念をいっさい捨て去る必要があるだろう。そのためには、フランス語がじつさいに使用されている空間に踏みとどまるつもりである。したがって、カトリックの伝統が支配する空間、すなわち罪の概念

を理解する特定の仕方、罪を抱かせる恐怖と良心の呵責を体験する特定の仕方が支配する空間の埒外に出ることはない。西洋における性の歴史を集大成した著作群を読むうちに、わたしはこの後退がどうしても必要であるという認識に至った。プロテスタント的アングロアメリカがこの分野において独占状態を呈しているが、性愛関係は、われわれがこれまで好んで観察してきた空間における心的文脈とはまったく異なる心的文脈でも展開している。歴史的な経過もまた違う。したがって、フランスという空間において、もう少し広く取ってラテン諸国全体において性愛関係を語るべきは、「ヴィクトリア朝的」という形容詞を使うことはまったく無意味でばかげている。

幸運にも一七七〇年から一八六〇年にかけて、フランス語のエリアは固定され、特権的な実験室となっていた。スイスの医者、さらにパリとモンペリエの臨床家は、当時、揺るぎない地位を保っている。だれにもまして現代のわれわれに関係する中絶性交が、神学者に議論のたねを提供していたのもフランスだけである。十七世紀中葉から、フランスがイタリアに取って代わった。ボルノグラフィックな文学の新しいモデルを練り上げたのはこのフランスだったのである。<sup>6</sup>

初期性医学の成果を忘れることにしよう。窃視症、露出症、フェティシズム、マゾヒズム、同性愛など、かつてミシェル・フーコーが性倒錯の長々しい目録の要素として示したものが中心問題にならない世界に取り組みつもりである。十九世紀末に学者たちが過去のあらゆる偉人の精神疾患を診断しようとしたやり方で、個人を病理学的主体に仕立て上げることがないようじゅうぶんに注意しようと思う。フロイト主義を忘れよう。フロイトが「欲望」に賦与した意味を、彼が定着させ世に知らしめた「性」の概念を忘れよう。性的アイデンティティーの構築、分配、潜在的な間欠性にかんして現在進められている省察にかんしてはなおさら、一切を無視することに

したい。

われわれが取り進む時代にはまだ同性愛も両性愛も、ましてや異性愛もなかった。つまり、当時使われていた語彙体系をわれわれは学ばなければならないのである。「セクシュアリティ」という語彙は使われておらず、「オルガスム」は器官の興奮と同義語であり、「冷感症」はわれわれが現在のこの語に与えているような明確な意味を持つていなかった。快感の絶頂は痙攣として知覚されている。われわれがこれから観察するのは、女性の快楽の頂点にかんする言葉がしばしば宗教的な語彙によつて刺激的な潤色を施されていた時代、「女性にたいする欲求」に悩まされ、回数数を数えては男性能力を気にする男たちがなによりもまず自らの性的能力と勃起力を示さねばならなかった時代、男性が女性の白さ、豊満さ、しなやかさを望んでいた時代である。「感覚」の乱れに絶え間なくさらされる女性が、それゆえ、女性に特有の数限りない病理の犠牲者として立ち現れてくる世界。ボルノ作家ばかりか医者や神学者までも、強姦の犠牲となった女性が——既婚女性「オナニスト」のように——快感を味わわずにはいられないはずだと考えていた世界。そういう世界に旅することになるだろう。

自律的排卵は一八四〇年代初頭まで知られておらず、女性にその存在が証明されたのはそれからさらに後のことであった。神学者もボルノ作家も、女性が男性同様精子を出しているという考え方を広めている。

したがってわれわれが取り組むのは、今日では放棄された、あるいははるか後景に追いやられた信憑が依然として存続していた領域なのである。当時、男女が同時にオルガスムに達することはきわめて重要だと考えられていた。マンヴィル・ドゥ・ポンサン医師はこれを「等時的な痙攣」と呼んでいる。女性は受胎するとき特別な震えを経験すると信じる学者が相変わらず多かった。女の方が男よりも快楽が強いかどうかというテレリアスの謎(テレリアスは

テーバイの予言者。ゼウスとその妃ヘラが性交において男女どちらの快楽が強いか言い争ったさい、九対一で女性の方が大きいと主張してヘラの怒りを買った目目にしたが、その償いとして予言の能力を授けられた」は、この時代まだ人々の念頭を去っていない。つまり、今日では消えてなくなつた亡霊がまだ跋扈していたのである。当時の人々は孤独な快楽、精液漏、子宮の憤激がもたらす害を、そのあとでは「夫婦の不正行為」がもたらす害を恐れていた。

医者と神学者はそれ以上に、歯止めなく生殖機能を使うと有害な結果がもたらされるとたえず述べている。性行為の過剰や濫用と同時に、医者は節欲の危険も執拗に力説していた。当時は、開業医の診察室でさえ口にできない種類の異常があつた。男性の不能、女性の自慰となるといつそう、その種の異常とされ、聴罪司祭がこれを追いつめようとしている。と同時に、性を分かつ二形性〔同一種類の形態的特徴が性によって異なること〕がいかに深遠であるか確信している医者たちでさえ、自然主義治療法説〔自然治癒力を治療の根幹に置く治療体系〕と種の宿命にたいする配慮から、実感に反する見解を抱いていた。「性的な欲び」は言語に絶するたくいまれな欲びだが、長期的に見れば致命的だという見解である。かといって、「性的な欲び」を欠かすわけにはゆかない。そこで、性器の適切な用法を守り、感覚を注意深く観察するとともに、快楽の質と調和を見極めるよう患者に求めている。

とはいえ、われわれが考察の対象に選んだ世紀は一枚岩ではない。女性も精子を出しているという考え方が少しずつ色あせ、生理学の進歩が感覚論と生気論を後退させると同時に、多くの神学者が「既婚男女の自慰」にたいして寛容になるいつぼうで、性的欲望をそそる新たな形象が次々と現れ、猥談とまではいわずとも、ポルノグラフィが最後の数十年で衰退する兆しを見せていた。

日記や書簡をよく理解し、スタール夫人、スタンダール、バルザック、フロベール、ジュールジュ・サンド、ゴーチエの小説に没頭

するためには、作品を読まなげに、当時肉体の出会いを支配していた信仰、信憑、規範といったものの体系をまず研究しなければならぬ。「アルテス・モリエンデイ」(良く死ぬ技法)と「健康維持法」のすぐとなりでは、聴聞司祭の手引き書、夫婦向け医学概論、その他の「ハウトゥー本」が組み合わされて妥当な官能を指南していた。これらの著作には命令、提案、禁止がふんだんにちりばめられ、そのどれにも取るべき態度、身振り、感情の一覧表が示されている。規範を垂れる調子にはうむをいわさぬ強さがあつた。ありうる来世像。魂と肉体のあいだの線引き。「自然」の要求や個人の使命。歴史、地理、「風土」の影響、気象の気まぐれな変化といったものに著者が与える重要性。それらに従つて著者はさまざまモデルを作り、助言を行つている。

これがすべてがベッドの快楽や良心と違反の意識を律し、良心の呵責や自責の念を吹き込んでいた。

こうした命令や助言のカタログは、玩味すべきあるいは獲得すべき体形、交接の場所と時間、体位、リズム、抱擁の熱中度、誘発される興奮の幅、だれの目にも明かな快楽や疲労や満足の徴の性質などにわたっている。神学者は欲望、合意、悦楽、官能を注意深く吟味するよう要求し、医者は患者が、自分の気質や特異体質を意識化し、自らの習慣をきちんと述べ、諸器官がどれほどの御しやすさで、快楽がどれほどの強度を持つのか評価することを期待する。

医者と神学者とポルノ作家が欲望、性的快楽、後悔を造形する。侵犯を生じさせ、他者にたいする態度を処方する。合一を夢見る態度と相手を手段として扱う態度のあいだで。これらのカタログ、お好みであればこれらの手引き書と言ひ換えるが、それらは一致するばあいもあれば、矛盾するばあいもある。歴史家の仕事はそのすべてを読み、決して理解を放棄することなく、対立することもある彼らの論理に耳を傾けることである。

この世紀の諸個人は、しばしば絡まり合った状態で供されるさま

さまざまな意見を適宜組み合わせ、複合せながらどのように行動し、どのように性的快樂を得るか選ばなければならなかった。習慣行動の研究は、先行研究を手がかりにして、頻度、リズム、興奮、感覺、性的快樂、嫌悪、後悔を、すなわち、人はいかにして肉体的結合を経験し、いかにして快樂とともに失望や悲しみを感ぜえたか、そのあり方を解釈できる者にとつてしか意味がない。

したがって、当時の男女が採用していた解を、現代の知の高みから、われわれの道徳的要請に従つて評価するという傲慢は避けよう。そして、なにはともあれ、残念ながらもまだわれわれの知らぬあの遙かなるシテール島へと船出しようではないか。

## 第一部

### 情欲の制御

引用文中のイタリックには、本書著者による強調のばあいがある。

## 第一章

### 「自然」の要求

この十八世紀末、人間の身体がなにかを感じたり、苛立つたりするのは、神経繊維が働いているためだと考えられていた。人間の身体は、神経網が叢生しているために引き起こされる緊張、震盪、痙攣の舞台であつた。当時大流行していた新ヒポクラテス派医学も官能にかんする言説を流布させており、環境から受ける影響を強調している。ただし、病理と臨床との比較による医学が飛躍的發展を遂げた点を忘れてならないことはいふまでもない。これについてはあとでゆつくり論じる予定である。生氣論、感覺論とともに、博物学的な観点にも立脚しようとする意思に支配された折衷的なアプロー

チからではあつても、医師たちは当時、男女の肉体的結合が引き起こす性的な快樂の秘密を理性的に捉えようと努めていた。

この時代、(性) という語はフランス語に存在しなかつた。この語が初めて登場したのは一八三七年、カール・フリードリヒ・ブルダツハのある著作の翻訳のなかであつて、その後二十年かけて、かなり遠慮がちに広がつてゆく。この語が現れる頻度はきわめて低く、語義も現在わたしたちが理解しているものとは違つていた。動物と人間において、性差による世代交代を可能にするもの、あるいは、種の存続を保障するこのきわめて重要な機能が存在全体に深く浸透しているさまを意味したのである。そこからブルダツハの翻訳書に見られる初発の定義は「性」とは種の分裂である」となる。一方、「性生活」という表現は医学的言説に遍在しており、とりわけモロー・ド・ラ・サルトやヴィレーが普及させようとしていたように、当時個体と種のあいだに察知されていた緊張を説明していた。「セックス」——当時の著者たちはこの語がラテン語の「セカレ」(分ける) から派生したとしている——とは動物界において一般的に雌雄を区別するものの意であつて、「死すべき存在」(個体)「の永続性」を保障するための器官——「生殖器」——によつて構成されている。したがつて、「世代交代のできる、したがつて死を免れ得ない生物にしか」セックスはない。「生殖器だけが種を体現する」。摂食、呼吸、血液循環等の機能は個体にしかかわらない。個体「それ自体は無力であり、死の領域に属している」が、種は存続する。したがつて、個体は「生命の根源」を成す「愛と呼ばれる本能」に支配されている。この世から消滅するまえに、個体は「自然の要求」、すなわち子作りを果たさなければならぬからだ、とされていた。

動物——ここではあらゆる種の動物をさす——はこうした種の存続の欲望を自発的に表現する。獣と人間が自らの使命を果たすために与えられた「美質の総和」を体現する自然は、自らが惜しみなく

与えることのできるあらゆる魅力を「享受する瞬間にとりわけ美しさを与えてきた」。要するに、こうして大衆化された自然主義は、性交を、個体が生存中に果たさなければならぬ根源的な行為、抑えきれない欲望を生みだし、抗いがたい快楽を得させてくれる行為として認めるよう仕向けている。こうした重要性があるからこそ、医師は性交を指導しようとしても良いというわけである。

同じ論理により、生殖器の状態が動物の質を決める。だが、ルーセル医師が早くも一七七五年に強調しているように、これら生殖器がいかに第一義的であるとはいっても、生殖器だけで「セックス」を語り尽くすことはできない。「セックス」それ自体のなかに雌雄を分ける原理が存在するいじょう、「セックス」は個体をして種の再生産に適応させる「さまざまな手段」をすべて含むからである。となると、逆説的なことに、男と女のあらゆる器官に「セックス」が広がっている、と考えざるを得ない。

そこから、たとえば、種としての雌は「一カ所だけが女性なのではなく、考察しうるすべての側面において女性である」という結論が導き出される。男性についても同じことが言えるが、男性のばあいはより表面的である。というのも、男性が果たす使命は外在性という形を取らざるを得ず、女性とはまったく異なる時間性に属しているからである。理の当然として、この自然の要求の優位性は、女性が女性として存在する期間内しか行使されない。その期間とは、幼年時代にあたる個体生活を脱し、受胎が不可能になるまでの、種の保存に向けられた「性生活」に到達できる期間である。

こうしたことを述べるさいのルーセルは、「アニミスト的」と呼ばれる医師たちが十八世紀後半に占めていた重要な位置を反映している。アニミスト的医師たちは、ゲオルク・エルンスト・シュタール（一六六〇—一七三四、ドイツの化学者、医師。生気によってしか無機物を有機物に合成できないとした）の観念にしたがって、女性性は本質として前もって存在する自然から生じると考えていた。女性性は、存在

の發展や開花を導く「臭素的な」生気の志向性を反映しているのである。そう考えると、女性の幸福はモデルの形で仮定されたこの生命精気に合致することにある、ということになる。ルソーが、そしてルソーのあとにはルーセルが、女性と自然の調和というユートピアを構想する。女性の感覚と母性の開花による調和のユートピアである。

これに対し観念学派、とりわけカバニスは十九世紀初頭にこの図式を拒絶する。彼らの関心はなによりも器官と心と社会的相互関係にある。したがって、彼らから見れば、女性性は存在論的な問題に属するのではなく、心理学と社会学が扱う問題である。当時、女性もはや形而上学的な存在ではなく、観察と分析の対象として考えられていた。

とはいえ、理論的次元におけるこうした転倒は、主として科学史にかかわっていたことは理解しておかなければならない。われわれが扱う時代全般をとおして、男性の表象、女性の表象、肉體関係の表象はみごとに一貫している。十九世紀初期の臨床家と生理学者はたしかに新たな体系を打ち立てるといふ偉業を成し遂げたが、感覚論やアニミズムや生気論との断絶にもかかわらず、両性のあいだの根本的な差異にたいする信仰は延命させてしまった。両性のあいだには根本的差異が存在するというこの考え方は、それを疑義に付すことになったはずの解剖学的、生理学的、臨床的発見を乗り越えて生き延びた。この時期の一貫性は、この連続性が基礎になっているのである。

ルーセルは、「性生活」がとりわけ女性において「肉体的・精神的諸関係の連続」を涵養すると考えていた。観念学派によってこの観念が深化される以前のことである。思春期と臨界年齢に挟まれたおよそ三十年間、女性は絶え間ない変化、動揺、変動に晒される。女性がどのように欲望を表出し、いつ快楽に身を委ねる気持ちになるのか理解したければ、母胎と母胎を他のさまざまな系に結びつけ

るものによって決定されるこうした絶え間ない変動を研究しなければならぬ。

狭義には博物誌から派生したこの見地に立つてこそ、ヒトという種の枠内で雄と雌を(共に、そしてその差異において)考察する必要がでてくるのである。専門家は、動物界の内部で、性の組織化——分割の原理——が異なった種で習慣、性向、嗜好をどのように決定づけているのか、そのやり方を分析する義務がある。ヒトのばあい、こうした性の組織化は最も完璧で、しかも遠い昔から非の打ち所がない。「諸感覚の一致と調和、触覚の完成度、大脳の発達、直立歩行、社会性にたいする本能」といったものがヒトの絶対的優位の基礎となっている。

このことから、肉体関係すなわち性的快楽が人間科学の中心に据えられることになる。それはとりもなおさず、生殖器が生体系に不可欠な部分であり、男性においても女性においても、肉体と精神のあいだに打ち立てられるものがきわめて重要であることを意味している。

とはいえ、分離の結果を記述するまえに、しばらく立ち止まって、「性生活」への到達期、すなわち少年少女にとつて思春期となるあの変容期に目を向けてみよう。ピュフォン以来、医師は好んでこの段階にこだわり、詩的に語ろうと努めてきた。やがて消滅する個体に最も重要な使命を果たす準備ができたこの時期は、人生のうちでも重大な局面にある。われわれが自然と呼ぶあの「内的諸力」は、個体を完成したのちでなければ種にかかずらわれないが、教育、社会生活、広く取れば文明に結びついた精神的な諸原因の総体によって発達段階が早くなったり遅くなったりすることで、個体の完成も早くなったり遅くなったりする、とルーセルは書いている。「生命の衝動の新たな形」から影響を被る若い男女は、ある欲求を突然認識して混乱に陥るが、内部で変容が進行してゆくおかげで、彼らの感覚——まずは「性的感覚」——は快楽を感じる能力を獲得

できるようになるのである。

思春期は「性生活」への到達期、すなわちシステム全体の「休息状態」から「活動状態」を待つ「覚醒」状態への移行として規定される。この時代に支配的だった生気論者の見地から見れば、この時期は器官が驚異的に活動する時期にあたる。若い娘におけるオルガスム——すなわち器官の興奮——および若い男性における勃起と過剰は強い衝動を生み出すが、これこそ「官能の甘く抗しがたい声に他ならない」。

その後、思春期の描像は真の変化を被ることはないものの、文献の尽きせぬ対象になる。思春期は、まずピュフォンが『人間の博物誌』においてきわめて重要な一章をこれに捧げ、ルーセルが熱意を以て発展させ、カバニスが生殖器と母胎と大脳のあいだの共感にこだわって理論化したあと、ランボルスギとブリエール・ド・ボワズモンが豊富な資料による裏付けをした。

医師たちはこの変容を、「セックス」を形づくり、「性生活」への到達を可能にする分離が起こる時期に始まる激動、動揺、衝撃として感じ、途方もない危険がもたらされる可能性を察知している。この変動はまず器官の変化として表れる。体内の力が働くことによつて「細胞全体が動き出し」、乳房と生殖器の周辺で「準備をする」、とルーセルは書いている。男性においても、女性においても、「栄養摂取の活動が倍加する」時期である。生殖器系と大脳という二人のオーケストラ指揮者の指令で形態学的な修正が開始されるのである。

医師たちは次々と学位論文を発表して、その後二度とない強烈な性的魅力を男性の欲望に向けて解き放つ女性美の絶頂を倦むことなく謳いあげている。この時期、声は「子宮の状態を示す徴候」になる。ヒポクラテスからボルドゥーを経てガルにいたるまで、生殖器が容量を増すとすぐに首と乳房が膨らむと信じられていた。肌は色づき、目は新たな欲望を表すようにきらきらと輝く。卵巣の活動

よって身体の線が柔らかくなる。「一般に腰の滝という名で知られ、臀部の筋肉と大腿部の後ろの筋肉の張り出しに紛れて少しずつ消えてゆく、肩胛棘下部の心地よく丸みを帯びたあの傾斜」が形成されるのはこのころである。

「生殖器によって興奮した知覚諸力」が女性の身体を豊満にする。サンブルーを森のなかで墮落させるジュリーの胸のように、「サンブルーとジュリーはルソーの小説『新エロイズ』の主人公」。「最初固く未熟な」胸がやがて膨らんでゆき、そのうち若い娘の乳房は「柔らかい弾力性」を帯びる。「乳房は膨らみ、赤くなり、子宮と共鳴できるほどの敏感な感受性を獲得する」「恥骨は毛で覆われ、小陰唇は赤くきわめて敏感になり、クリトリスははつきりとしてくる。処女膜は伸びてたるみ、膣道は周囲の器官が膨らむことよって狭まることもあるが、オルガスムによって膨張しやすくなり、敏感な感受性を得るようになる」。血液が子宮に流入し、毎月血液が過剰になる。月経が始まるたびに新たに体温が上昇し、脈拍が亢進し、発汗が促進され、それまでよりも強い体臭を発散する。そして子宮は「それ以後変わらぬ大きさ」を獲得する。

男性においては筋肉系が目立つようになり、声が男らしくなり、髭が生える。とりわけ生殖器の勃起が明確になり、意志に反して我が物顔でふるまうこともしばしばになる。

この同じ時期、とりわけ若い娘においては感じ方に深い変容が生じる。オルガスム、「膨満状態」、外陰部の「むずむずするような欲望」がこの生殖器系に火を点け、こんどは生殖器系が、それと無関係な部分に特別な影響力を伝えるのである。「生殖器系によってのみすべてが一変する。本来の意味の感覚がもはや同じものでなくなったり自然のあらゆる対象に新しい相貌と新しい色彩を与えたりするもの、その原因はやはり生殖器系であり、その強力な影響力である」。

支配的な「生殖器感覚」の声を新たに聞き取ることがいつそう重

要になる。というのも、「体組織の深み」、人からは見えない内部では「特別な感覚」、「性的な感覚」が育ちつつあるからである。この「性的な感覚」が新たな状態を特徴づけ、どうやら他の感覚を消し去ってしまったらしい。残念なことに、いかに強く抗しがいも感覚であっても、この性的な感覚は正確に描写することができない。思

春期を襲う偏頭痛や涙や熱はこの感覚だけで説明がついてしまう。医者は「心の嵐」に伴う心の変化を喜々として際限なく描写する。「魅力的な困惑」、「無邪気な羞恥」、漠たる欲望、絶えざる夢心地、「おどけたような陽気さ」の喪失、それが思春期の肖像を穏やかにする。しかし一方でそれは、子ども時代の騒々しい喜びから遠く隔たった「若く柔らかな不安」、魂の不穏な動き、孤独の危険な欲望、いやそれどころか陰気なメラニコリーによってさえ曇らされている。「うち萎れ、色あせた」若い娘は「それまで体験したことがないほどに、気分も機嫌も変わりやすい。ふとした拍子に涙が頬を伝う。ときおり洩れるため息。なにかを望んでいるのかいなのか。欲望の対象もはつきりしない。彼女は自分自身がよく分からないのだ。若い娘は赤らんだり、青ざめたりする。「彼女は燃え、そして凍るのである」。自然はまず若い娘のうちに男性に対する嫌悪を惹起する。しかし、すぐに好奇心が優勢になる。少年においても、若い娘においても、「感覚」が少しずつ異性に向けてゆく。

「思春期は未知なものを探求する。しかし、止むに止まれぬ欲求からそうするのである「…」思春期の想像力が浸る絵は茫漠としている」。若い娘において変化はより急激である。「そのとき初めて世界は存在し始める「…」この不安定な存在が驚きの目を見張るなか突然緞帳が上がり、彼女の魂には、自らの生命の最重要用件「…」にかかわる感情や思いがどっと流れ込んでくる」。

「愛の神秘」を知りたい若い娘はいわば、目の前に現れるすべての人物の持ち物や行動を探る。身振り、言葉の端々、手から落ちた本、「そうしたすべてが若い娘の探求心と好奇心をかき立てるが、

発見によつてさらにかき立てられた探求心と好奇心は、最後に烈しい欲望を若い娘のなかに産み落とす<sup>40</sup>、想像力——この大げさな言葉は粗雑だが——はこうした「新しい素材」のおかげで、いっそう強い感化力を持つ。精神はイマジニに付きまとわれ、「魂は感情に左右(さされる)」。こうしたことはすべて、体内の器官が絶大な力を揮っているからであつて、ことさら外からの感覚刺激さえ必要としない。

想像力が発動すると——周知のように想像力は古典主義時代以来とりわけフランスで長いあいだ攻撃にさらされてきた——たしかに、豊穡な観念はかき立てられる。しかし、想像力はとりわけ幻影を生み出す。若い娘は、若い男性よりもよりなおいっそう、この危険な作用にさらされる。「若い娘の体内において最も密やかな器官を引き出してきた」自然が、「その器官の持つ欲望を隠蔽するばかりか再び体内に閉じこめるよう彼女に促しているらしい」<sup>41</sup>だけにいっそう。したがつて、思春期を結婚適齢期と、次いで、結婚と分かつこの危険な過渡期の脅威は大きい。「わが国民の制度において、処女を取り巻く状況は、自然の衝動にたいする『絶えざる暴力』である<sup>42</sup>」とヴィレーは考える。動物の若い雌と異なり、人間の若い雌は、強い欲求を感じたからといつてすぐに雄と出会えるわけではない。概ね、若い男性にたいする好悪を動物ほど表現できないだけになおさら。したがつて、思春期に達した若い娘には、自らの想像力に駆られるまま誤つた途に迷い込む危険性が存在する。都市ではとりわけその危険性が大きい。というのも、カバニスによれば<sup>43</sup>、都市のような環境においては、思春期にゆつくりと発現するための時間が与えられず、周囲のスピードがそれを凌駕しているからである。したがつて、思春期が近づくと若い娘に神経障害がとりわけ多発することは驚くにあたらない。ラシボルスキは、そうした神経障害の例として舞踏病、強硬症<sup>44</sup>、嗜眠症、女子色情症、ヒステリー、精神病などを延々と挙げてゐる。われわれは後に、古代医学

から受け継いだ痙攣性という説明図式を見ることになるが、この図式は、ある年齢以降快楽の必要性に屈服せざるを得ない若い娘たちの苦悩を明確に描いている。

思春期のこうした描像が、男子色情症においても、女子色情症においても、その後の研究に必要不可欠であることは納得いただけるだろう。過度な禁欲、自慰、肛門性交、獣姦の実践は、いずれも「自然」の要求を満たすことを拒否した結果生ずる病と考えられていた。

最良の治療行為たる性交の実践が奪われた人々、とりわけ女性において、こうした性交の拒否や悪習の実践によつて惹起される害を阻止するために当時強く勧められていた肉体と精神の衛生学がいかなる考え方に基づいていたか、これについては、本書の先で分析するつもりである。

しかし実は、こうして「夫婦の喜び」——当時の医者は出版物のなかでこれ以外の表現を使うことはきわめて困難だった——をどうしても必要とする期間は、若い娘においては月経の開始から、若い男においては自発的射精の開始からわずか一、二年間のことにすぎない。自然に変容を全うさせる時間を与え、「未熟な快楽」の苦悶を若者たちに避けさせるのが、その目的である。

この期間にも、自然は欲望を膨らませ、「性」を構成する分裂を促進して止まない。この分裂が促進されるにつれ、「他者」の神秘も、「他者」が抱かせる好奇心も膨れあがる。ますます顕著になる違いに刺激され、欲望はいっそう募り、一体化へと駆り立てられる。とはいえ、違いはまださほど大きくない<sup>45</sup>。したがつて、自然の要求に忠実であろうとすれば、いかなる過度も控える必要がある。類似は、いや、たんなる相似さえ、神秘や興味を、ということは欲望を消し去るが、その一方で、異質性を生み出す違いも、度が過ぎれば同じ結果に陥ってしまう。動物の雄が雌と番うのは本能によるに過ぎないが、この雌は雄と同じ種に属しており、したがつて、両

者のあいだに根本的な違いがあるわけではない。人間の男女のばあい、類似に対する指向性は重大な過ちである。自然を欺くからである。だが、その一方であまりに大きな違いも調和を破壊する。そこで、高い識別能力を必要とする男女相互の探求が次第に姿を現し、医者がこれを積極的に進めようとする。余人には感知できない微妙な徴候を読みとる技術によって、医者だけが、どんな不調和も回避することができる。一八二四年、生理学者のアドゥロンは、彼なりのやり方で、相同性と相違性を表現している。ルーセルに呼応しつつ、相同性と相違性の思考をこう複雑化する。「男女は本来の生殖器のみにおいて異なるばかりではない。〈類似しているとはいえず〉、他の諸器官もまた性による〈差異の刻印〉を受けているのである」。

両性に共通する諸器官はすべて「へなにがしかの特殊性を示している」。

差異の刻印を重視するこのニュアンスに富んだ言い回しから、差異にたいするさわめて繊細な評価が看取できる。いずれにせよ、医学の言説において、女性は、生殖器系以外の系におけるあきらかな相同性にもかかわらず、「その存在様式全体が女性」であり、したがって、「その欲びにおいても、また苦痛においても」女性なのである。

主流の自然主義は美の概念に価値を見いだす。美の素描は、他者にたいする悦楽の約束と分かちがたく現れるのである。この説を奉じる医者にとって、美しい身体とは欲望を触発する身体に他ならない。技巧によって装われた美に投げかける彼らの言葉からは、ただ罵声しか聞こえてこない。彼らが讚える美は、芸術のフィルタさへ通さずとも、完全なる裸形性によって暴露されていることが前提となつている。体毛などを描かないことによって生体のもつとも露骨な徴を除去しようと努める画家や彫刻家と違って、医者は、欲望を惹起する美のいかなる臨床的徴候の描写も拒まない。しかし、エロティック文学やポルノ文学とは異なり、医者が描く裸体は、読

者に性的な興奮を与えることを公然と狙っているわけでは決してない。

医者から見れば、美は「自然」の要求に応えようという明らかな性向、すなわち生殖能力から生じる必然的帰結である。美は、性交がうまくゆくだろうという予感と密かに結び合っている。「自然」はじつに見事にできあがっていて、「それが生み出す存在の諸要素や、諸要素から引き出さねばならない使用法にまで」影響を与えている、とルーセルは改めて指摘する。かならずしも十全に意識はしていなくとも、男女は一連の差異を求めている。しばしば感知しにくいこの差異は、(身体の、気分の) 調和を実現するが、この調和こそ、「自然」の要求を十全に満たす前兆なのである。こうして、調和に満ちた全体の再構築へ向けたこのプラトンの飛翔は、アンヌ・キャロルが見事に示したように、微妙な優生学主義を抱え込んできた。

医者によって素描される男女の身体像は先行する描像から導き出され、両者が相いに比較されてはじめて意味を持つ。

女性の身体は、女性が女性であることを主張できるおよそ三十年間、ポッティチェッリのヴィーナスに見られるような「幸福な調和」によって特徴づけられるが、その後、この均衡は崩れる。男性を受け入れるためにつくられた身体という考え方は、内面性、中心性、湿潤性の図式に一致している。女性の身体とは、なによりもまず、男性の欲望を煽り、ペニスの挿入と精液の放出に導くことを目的とする異なのである。

医者は概ねビュフォンとルーセルに従って、骨格と「固い部分」の描写から女性の身体描写を始める。骨格を形成する各部分の比率が飽くことなく記述される。男性の骨に比べて脆く白い女性の骨は、分量もまた少ない。男性を受け入れやすいように女性の骨盤はより広く大きく開いて丸みを帯び、股関節はより間隔があり、腹部はより広く、恥骨弓がより開いている。「仙骨、尾骨、無名骨(現

在では寛骨という」が両性で最も明瞭な差異を示す骨である。「臀部はより突き出し、盛り上がって(いる)」。下肢上部にかんじていえば、女性は大股の間隔がより広く、「わずかに内側に向いた」両膝関節はより接近し、したがって、間隔がより狭く、大腿はより短く、足もより小さく幅が狭い。そのため、女性の歩行は「揺れが大きく、安定性が悪い」。ブルダツハによれば、女性は歩幅が小さく、速く走るのはむずかしい。男性に比べ、肩は幅がより狭く、よりなだらかで、腕は短いより太く丸みを帯びている。「手はより小さく、丸みを帯びて白く、よりぼつちやりしていて、指はより細長い」。

胸と腰の比率は男女間で逆比例する。「自然」の要求実現という観点から、すなわち潜在的パートナーに生じる欲望の実現という観点から見ると、最も重要なポイントは、「内部の忠実な鏡」たる体形の表現力にある。女性においては体の丸み、艶、均整美によってこの表現力が発揮される。女性における身体的同質性の表現は、球体モデルで安定的に知覚される傾向によって、すなわち繰り返し返される半球というモデルによっていっそう強化される。もつとも、各著者によってその比喩はまちまちで、たとえばヴィレーは女性の身体を「頂点へ向けた上昇」と考え、ブルダツハはそこに細長い卵型を、アドウロンはピラミッドを、マンヴィール・ド・ボンサンは螺旋を看取している。ただ、だれもが強調するのは、ブルダツハによれば波打つような、あるいはうねるような線の均整美、モロー・ド・ラ・サルトが見るところによれば「くねくねと曲がりくねった」身体線の均整美である。

医者は、女性の丸みを帯びた乳房、腰、大腿部に、明らかに喜びの宿った眼差しを注いでいる。尻はエロティック文学のように語られることはなくとも、その美しさは身体各部の描写から自然に導き出されてくる。彼らが「輪郭線」の重要性を強調するようすは、今日の読者に強い印象を与える。問題となるのはつねに女性の身体の

優雅さ、繊細さ、うねるような曲線なのである。「起伏のある心地よい輪郭線」は、顔の骨格にいたるまで、微妙な陰影をつけながら優しくうねる身体の豊満さを保証している。これらの医者は痩せた身体を、女性にとつて「ぞつとするような不幸」と忌み嫌う、トラシボルスキは書いている。彼らは、ごつごつとしたもの、尖ったものはなんであれ口を極めてのしるのである。

医者はとりわけ肉体の稠密度、視覚的印象、とりわけそこから生じる触覚的印象にこだわっている。細胞組織の豊富さから生じる「柔らかさ」は体形の柔らかな均整美を保証し、体形の柔らかな均整美は鋭い凹凸を消し去り、窪みを埋めてくれる。女性においては、感覚的印象が、繊維によって宿命づけられた繊細さ、脂肪の適正な比率、血液に対するリンパ液の優位と調和している。

男性の肉体より稠密さにおいて劣るとはいえ、女性の肉体は、とりわけ乳房、下腹、臀部において「弾むような」身体と形容されるあの張りを備えている。稠密度において穏やかであっても、将来男性の激しい衝撃を受け止め、胎児の成長に伴う膨張を可能にするための強度を失ってはならないからである。この稠密度は、せいぜいところどころ薔薇色に染まるくらい白い身体と調和している。後にまた見ることになるが、白さというこのモデルは中世以来支配的で、純潔さ、処女性、無垢を示している。

医者が描く女性の身体像は、触覚の描写に大きく頁を割いている。肉体的接触のさいに演じるべく求められる役割によって、皮膚は微に入り細を穿って描写されることが許される。透明な肌は「静脈の青さ」まで伝えずにはいない。ざらざらしたところのない、ピロイドを思わせるような肌の艶と柔らかさは、とりわけ首、腕、大腿部の内側に集中している。しかも、女性の肌は総じて穏やかな反応性を示す。ブルダツハによれば、より滑らかで透き通った女性の肌は、より硬く、張りつめ、臭いのきつい男性の皮膚よりも血液の供給が少なくてすむという利点がある。女性の唇は色も形もどこと

なく陰唇に似ており、頭髮は恥毛を思わせる。男性よりも小さな口は白い歯をかいま見せる。<sup>64)</sup>

女性の身ごなしは動きの緩慢さと、たえず強調される敏捷性、柔軟性、優美さ、軽快さが、まるでその矛盾に気づかれていないかのように両立している。当時の画家や彫刻家が描く女性像とも矛盾ないこの描像全体は、もちろん、「自然」の要求の実現、すなわち肉体的な結合という観点においてのみ意味を持つ。

こうした医学文献が女性特有のものと考ええる感受性は、われわれの考察対象を勘案するとき、きわめて重要な意味を帯びてくる。男性において筋肉が幅を利かせているように、女性においては神経が圧倒的な影響力を持つている。女性は全身が「震え」のなかにある。とりわけ皮膚、舌、目に至る「女性の末梢神経はより太く、より発達しているように見えるからだ」とアドゥロンは力説する。したがって、この部分にかんしては「影響の被りやすさ」が、感覚全般よりも強い。<sup>65)</sup> そのうえ、より繊細な女性の筋肉は、よりしなやかで湿潤な神経繊維に調和していることをマンヴィル・ド・ボンサンは明確にしている。女性の横隔膜——啓蒙の世紀の感覚分析において、横隔膜というこの器官が重要であったことはよく知られている——は男性の横隔膜よりも影響を受けやすい。<sup>66)</sup> しかも、女性においては、子宮がこの感覚部位に酷似している。これに、持続力に乏しいとはいえ、女性の体組織に特有の被刺激性(ハラール)が加わる。最後に、男性の体組織との比較がなされ、女性の体組織は勃起組織が広く拡散していることがその特徴とされている。

感受性——われわれにとつて最も重要なポイントはこれである——は男性と女性では深く異なる。女性は「興奮の猛威」に晒されやすく、そのため、「直接的な原因」に屈服しやすい。感受性の強い女性があんなにも鋭敏に深く感じていながら、その感覚の優位があんなにも短いものであることは強調しておく必要がある。女性においてはさまざまな印象が素早く連続し、深く刻み込まれること

がない、とカピュロン医師は断言する。<sup>68)</sup>「高ぶ」るが、それが長続きしない感受性は興奮状態に似ている。たとえばそれは声の間断なき「変化」、「転調」にも現れる。「女性の顔では、眼差しや微笑みが絶えずなにかを訴えかけている。ちよつとしたきつかけでとつぜん泣いたり笑つたりする。手足は絶え間なく動き、呼吸はしじゅう変化し、ため息をついたかと思えばむせび泣く」とアドゥロンは書いている。

荒れ狂つたかと思えば正反対の状態に落ち着くということをしじゅう繰り返す「慌ただしい動揺」に加えて、痙攣の連続や周期的な意気消沈にさえ晒される女性は、完全に〈瞬間〉の支配下にある。女性は現在からの脱出にひと苦労する。女性の気まぐれや一貫性のなさ、たちまち赤くなつてはまたすぐに素面しらふに戻るさま、目の輝きが生殖器の状態を伝えるという特徴もまた、ここに由来する。要するに、女性とは「いかなる細部においても自らの生に立ち会う存在」なのである。以上のように素描された女性像は、この文脈においてもまた、「性的快楽」を扱う頁の地下になつてはいるが、それについては後に見ることにしよう。

医者は、女性の感受性にかんずるこのような総合的な評価だけに満足しない。こうした一般性を各感覚の受容性の分析と調和させようと努めるのである。女性においては、肌の繊細さのおかげで触覚がデリケートである。女性の触覚はさまざまなニュアンスや細部を捉えることができるが、その反面、自分の表皮の肌理よりも粗い男性の表皮を愛撫する欲びは少ない。「丸みを帯びた艶やかな肌を駆け回る欲びを、おそらくあなたがた女性はわれわれ男性ほど感じていないだろう。われわれはその肌到手と舌を這わせるとき、無上の喜びを感じるが、あなたがたの愛撫は、触れる欲びよりはむしろ感情からやってくるように思える。なるほど、われわれの体形はあなたがたの体形のように丸みを帯びていないし、われわれの皮膚はあなたがたの皮膚のように柔らかくも薄くもない」とモロー・

ド・ラ・サルトは書いてある。愛撫をめぐる比較分析的なこの概説は、モロー・ド・ラ・サルトの膨大な著作がまずもって女性読者に向けられているように思える点で興味深い。ところで、『百科全書』の「快楽」の項目から帰結するところとは反対に、また、曖昧な先触れを別にすれば、医学的言説には肉体の一体化の与える身体的興奮に加わる感情と幸福感の高揚といったものはさしあたり見当たらない。まるで医者にとっては、愛の一夜の翌日にサン＝ブルーがジュリーに宛てて書いた書簡五二の調子などなきがごとしで、むしろ、早くも一七四九年にビュフォンが素描した見地にとどまっているかのようである。

女性の目から見れば、必要なのは穏やかな明るさと「どぎつすぎない」色だけだ、と加えてモロー・ド・ラ・サルトは言う。藤色、淡い青色、橙色、緑色がそれで、赤や極端な白はだめ。大きな騒音や甲高い音も女性の耳を危うくする。女性は「楽しい音楽にせよ、悲しい音楽にせよ、優しくて柔らかいものしか」受け付けない。「嗅覚の逸楽は、われわれ男性よりもあなた方女性をより第六感の逸楽へと差し向ける」と潜在的な女性読者に宛ててさらにモロー・ド・ラ・サルトは書いてある。また、女性は男性よりもいっそう洗練され、いっそう良識的で、いっそう慎ましい食い道楽である。強い風味、濃い味付けの料理、アルコール度の高い酒は嫌がり、あつさりとした飲み物、穏やかな食品、牛乳、果物、野菜等を好む。ブルダツハも他の同業者たちと同じ確信を以てこう明言する。「女性の感覚が持つ感受性はよりデリケートであって、女性をまっとうに心地よくさせるものとして軽微な(興奮)以外にありえない「」。女性の感覚に力で働きかけるものはことごとく女性を不愉快にさせ、女性の気分を害する」とブルダツハは書いてある。女性の官能性のあり方にかんする医学的言説が、読者を巧妙に肉体的快楽の連想へと導こうとしていることは明かである。

女性は全般的に、自らの感覚の分析において手際の良さをよりよ

く示す。敏捷で活発な視覚を持つ女性は、細かな違いや細部の把握に優れている。こうした鋭敏な分析能力は第六感の高感度を予想させるが、第六感を知覚する能力はあまりに深く秘められているので、さしあたって臨床医が探り当てることはできない。忘れないようにしよう。「感覚」への曖昧な仄めかしが、当時、卑しからざる女性にたいして許されるたったひとつの欲望の表現、たったひとつのエロティックな感覚への暗示だったのである。当然、この曖昧模糊とした表現は、五感が受け取った印象をきわめて付随的に描いているに過ぎない。最も深いところで「性的生活」に属している感覚の不透明さが、どんな下品な詳述にもいっさい触れがらない羞恥心を培っていたのである。

女性の欲望における生理的な律動性は、避けて通れないほど明瞭なため、臨床医は終始これを強調する。淫奔の周期的変化と月経のサイクルに果たして関連性はあるかという議論の裏には、女性の欲望における律動性へのこうした確信が控えているのである。厳密に言えば動物の雌のように発情期があるわけではない女性とはいっても性交可能であると医者たちは一致して力説する。ところが、いざ欲望の浮沈を計測する段になるとたちまち意見が四分五裂する。とはいえ、性器の感受性が規則的に高まることは大多数が認めているようだ。その規則性が、オルガスム(器官の興奮、膨満状態)から導き出されたものにすぎないとしても。

最後に、この問題にかんして十八世紀半ばに一定の認識段階に達したことを『人間の博物誌』で示したビュフォンにひき続き、啓蒙主義時代の豊かな人類学の影響によって、医者たちが、「風土」、地理的状况、気温、特異体質にしたがって性行動は多種多様であることを力説している点に注目したい。この「風土」、地理的状况、気温、特異体質についてはあとでもういちどふれる必要が出てくるだろう。また、学者たちは、「性的生活」の諸段階を通して女性美が次第に衰えてゆくようすも好んで描写する。たいてい思春期のあと

にやってくる節欲の苦悩から解放してくれるという意味で夫婦の欲びは推奨されるが、その欲びもやがては失われてゆく。定期的かつふんだんに繰り返された快楽は、出産と同じく、女性の身体に痕跡を残す。「『自然』の要求が満たされると「…」、女性はじよじよにその輝きを失う「…」。器官がその色艶と魅力的な形を引き出していた膨張力は弱まり、勢いを失う。そして、通常成年期とともに現れるあの肥満によって肉を支えきれなくなり、かなり瑞々しかったあの雰囲気によって強い印象を与えることもできなくなると、器官に与えられていた柔軟性と（張り）が失せ、後には不愉快な弛緩だけが続く」とルーセルは書くが、いささか不安になった彼はこう付け加える。「この新たな変化はたしかに思春期の宿命であるしなやかな体つきと両立できないが、少なくとも貫禄ある美しさと魅力だけは残しておいてくれる」。

コロンバ・ド・リゼールは同じ事実を認めているが、彼の面白い、快楽により大きな影響力を認める。「頻繁に繰り返されるエロティックな痙攣」は、出産に加え、女性美に悪影響をおよぼす。惚れっぽい体質の女性、あまりに強い感受性を生まれ持った女性は、たちまちその瑞々しさを喪失してしまう。彼女たちは「冷感症体質の人、興奮しにくい人が長いあいだ保つあの柔らかな体の線を、いち早く失ってしまう」のである。

閉経期を迎えて、女性が「種にたいするあらゆる義務から解放された」とき、自然は「残された最後の時間の利用法を（個人に任せろ）」。個人へのこうした転換、いやむしろ帰還というべきかもしれないが、それは人生の微妙な段階で生じる。「彼女（閉経期の犠牲者）は、昔はさぞやと思わせる魅力の残り香で人の関心を惹く「…」時間はまだ残っている」。ところが次いで「女性の地獄」が口を開ける。「すべてはしおれ、すべては崩れ、女性の諸器官を活気づけていた生命の衝動は内部へと縮み込んで、体の外部ではほとんど何うことができなくなる。女性を支えてきた豊かな肉づきは消え

去り、本来の体重へ戻るに任せる「…」」。

モロー・ド・ラ・サルトには臨床医のこうした残酷な視線がある。脂肪が止めどもなくつき、腹部が出る。腹部はその張り艶を失う。やがて大小の皺が増え、首の肉が落ち、胸が垂れ、鎖骨が飛び出し、関節は弾力を失い、子宮は知らぬまに縮む。「女性は自分が種にとつてもはや無であることに気づくのである」。

コロンバ・ド・リゼールも「女性の地獄」に触れている。彼もまた「母体がしだいに効率を落とし、やがて他の器官と同じ範疇に帰る」いつぼうで「肌の張り」も失われてゆくと力説する。それにもかかわらず、この時期に「新たな性的快楽によって身を焼く情熱を冷ま」そうとする女性の苦悩については、後で見ることにしよう。それは「とんでもない事故」に身を晒そうという試みである。

こうして引用を重ねても、これら学者たちの言説に含まれる詩的濃度がいかに高いかはぜひとも納得してもらわなければならない。これに続く半世紀のあいだに、この詩的な口調も徐々に冷たい科学的記述に道を譲るようになるのだが、それでも医者たちの熱情は、われわれが扱う時代が終わるまで完全に涸れることはない。マンヴィル・ド・ボンサンは、一八四六年、依然として医学における詩情を操ろうとしており、女性についてこう書いている。「その目には海の魅力がある。その豊かな髪は電気の発生源だ。その処女なる身体のうちねりは優美さと柔らかなさを、大河の蛇行やつる植物の絡み合いと競い、創造主はその美しい胸に世界の形をお授けになった」。

いつぼう男性の身体論は盛り上がり、進歩がない。いずれにせよ、医者にしてみれば、自が間断なく経験している男性というこの対象に女性と同じ神秘の部分が隠されているとは思えないし、筆を熱く突き動かすものを感じることができない。女性を対象とするときには欲望とないまぜになつてあんなにはつきり感じられた幻惑がないために、どうしても素っ気なくなつてしまうのである。男性のばあい、生殖機能に属するもの全てがさほど複雑でないことも与つ

ている。男性の身体美の描像に含まれる細部がより少ないのは、それを細かく見ようとすると目が存在しないからだ、とマンヴェイル・ド・ポンサンは力説する。自然の要求は、男性のばあい、身体にさほど深く刻印されていない。男性は外側に向かっている。生殖器は概ね外部に付いており、いわば周辺的である。こうした相対的な外周性から、必然的に、力強さ、努力、精力を含蓄する発揚、膨張、精力といった特徴を持つことになる。女性の身体の湿潤に、男性の身体の熱と乾燥が対立しているのである。

「よくできた男性の身体は四角くなる」。モロー・ド・ラ・サルトは、名前を出さずにビュフォンを引きながらそう断言する。ヴェイレーはむしろ男性の身体を逆ピラミッドに見立てている。ブルダツハによれば「男性は(女性と比較したとき)その長さにおいて勝っている。より長く、円錐形で、両サイドが引き締まり、下半身が狭小である」。だが、男性の体形が球形の対極にあることは全員認めるところで、すべてが直線的で固く強いとされる。男性の堅固さ、強固さは、女性の身体の柔らかさと同極を成す。男性の身体においては角張りが支配的である。医者たちは体の輪郭線については語らず、突出部や、他から区別しやすい部位について語っている。「険しい表情をした」筋肉は力のしるしである。女性よりも太く硬い骨のうえにその筋肉が載っている。男性においては繊維の稠密さ、体臭の強さ、体毛の多さが特徴である。筋肉と生殖器系の競争の犠牲となった運動選手のような極端な体躯を実現せよというわけでないとしても、文人のような虚弱な体形を避けることだけは肝要だとされる。

男性の感受性は女性の感受性の対極にある。あるいは、その陰面だといってよいかもしれない。知覚神経の鋭敏さ、感覚的メッセージの分析能力は女性よりも低い。だが、そのいっぽうで、受けた印象はより長続きする。欲望を表出したりエロティックな印象を受容したりする場所は、女性のように体表面に分散しておらず、外生

生殖器に集中している。陰茎の勃起力と亀頭の感受性は、つまるところ、自然が男性に託した使命、すなわち挿入にかかわるすべてを成就するための道具であることを目指しているのである。そこに触覚と、女性の官能的な丸みを愛撫することによって得られる性的快楽の重要性が加わる。

すでに見たように、性を生み出す分離はその他の器官系の機能にも差異をもたらす医者は言う。例えば消化作用にも両性に違いがある。「男性は肉食動物に近く、女性は草食動物に近い」とブルダツハは考える。男性は、自分たちをより大きく、凶暴で、遅くしてくれる動物性食品が好きで、女性は植物と牛乳を好む。男性は「強力だが繊細さに欠ける自らの被刺激性」に生気を与え、「自らの繊維にふたたび活気を与える」ために香辛料と強い酒を必要とする。呼吸も男女で同じではない。女性の肺はより小さく、酸素の消費量も少ない。女性において酸素の燃焼は「静かで穏やかな赤熱にすぎないが」男性にとつてそれはパチパチと音が聞こえてきそうな炎である。

ルーセルはすでに、女性の脈拍がより小さくより速いことを指摘していた。カピュロンの断ずるところによれば、要するに、「女性において循環、呼吸、消化、栄養摂取、分泌は男性よりも少ないエネルギーでより速く行われる」のである。性交における激しい高まりを記述し男女差を強調するさいの医学的言説に、こうした確信と観察の全体が影響を及ぼしていることは言うまでもない。男性は外部に向いているために、行動、努力、野望、「自我の拡大」、拡張を、したがって進歩を促進するものが自然から賦与されている。男性にあってはすべてが運動、膨張、生成変化を連想させる。「女性は在り、男性は成る。ところが成るとはつねに不安定な事柄である」とブルダツハは断言する。男性の伴侶たる女性はそもそも、男性が自然と一体化するために必要な紐帯を結ぶ手助けするという使命を負っているのである。

いっぽうの女性は、内部性に属するすべてと自己を同一化する。器質や体質に属するものをより鋭敏に聴き取る能力を与えられているのである。女性を孕ませる使命が射精の短さに集約できるのでに対し、女性の使命は受胎、妊娠、授乳など母性にかかわるあらゆる責務にまで途方ない広がりを見せている。幸いなことに、女性が外部の危機に左右されることは伴侶たる男性に比べてより少ない。現在と一瞬の感情に敏感である女性は、したがって、細かな違いの持つ意味を理解し、細部や小さなものに配慮する力を与えてられている。

女性にとって倫落は取り返しのつかない行為である。身を誤った女性は「自然」の要求を放棄したに等しい。彼女は我が身を外部に開いてしまった。自らの身体を、母性を、目的のない性的快楽に委ね、自らの性の美質を喪失してしまったのである。彼女の前には不可逆的な運命が姿を現す。そのときから、自分ありとあらゆる過激な行為ができることに彼女は気づくのである。女性は自然の障壁によって悪徳から守られている。だが、その障壁を越えることは女性にとって決定的な行為となる。たしかに強い情念は男性の体質に起因するし、男性は侵犯に対する強固な障害を見いだせない。だが、男性にとっては復活すること、最初の状態を回復することは容易である。

いっぽう、零落の前に立ちほだかる障壁をひとたび飛び越えてしまつと、女性は「ひたすら墮ちてゆくばかりで、転落に転落を重ね、もはやどうにも後戻りする力を見つけないでできなくなる。なにも出発点にまで戻れないと言っているのではない。その場で立ち直ることすらできないと言っているのだ。[...]やがてその人は男でも女でもない、どんな不埒なこともやってのけるぞつとすような存在になる。そうなるもはやモラルなどいかなる歯止めにもならない」とマンヴェイル・ド・ポンサンは書いている。こうして性的モラルの自然化と二重基準が完成する。この論理にしたがえば、侵

犯の範囲、反道徳性の辿る途、人間存在の変貌は性によって根本的に異なることになる。パラン・デユシヤトレの目に売春婦が死肉と同じに映ったほど事態は深甚である。医者たちによって流布されたこの自然主義につねに注意を払っていないと、一七七〇年から一八六〇年における性愛関係の研究に手を染めても、対象をまったく理解できないままに終わってしまう危険がある。

(1) PIGAUT-LÉBRUN, *L'Enfant du bordel, dans Romanciers libertins du XVIII<sup>e</sup> siècle*, Paris, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 2005, p.1270.

(2) *Ibid.*, p. 1238.

(3) *Ibid.*, p. 1239.

(4) *Ibid.*, p. 1250 et 1251.

(5) 現在の状況を解明し、起源を把握する目的で時間を遡る方法をいう。たぐやせ、SYLVIE CHAPERON, *Les Origines de la sexologie, 1850-1900*, Paris, Audibert, 2007.

(6) しかも私見によれば、本書が対象とするこの期間、われわれの論じる問題にかんするかぎり、アングロサクソンの世界はイタリアやドイツ語圏よりも貢献度は低かった。もっとも、議論の余地はあるかもしれないが。

(7) Michel FOUCAULT, *Histoire de la sexualité*, Paris, Gallimard, t. 1: *La volonté de savoir*, 1977.

(8) *Cf. infra*, p. 82.

(9) 自然主義と生氣論を扱った著作を以下刊行年代順に列挙する。Jean EHRARD, *L'idée de nature en France dans la première moitié du XVIII<sup>e</sup> siècle*, Paris, Sevpen, 1963, réédition: Paris, Albin Michel, 1994; Jacques ROGER, *Les Sciences de la vie dans la pensée française du XVIII<sup>e</sup> siècle. La génération des animaux de Descartes à L'Encyclopédie*, Paris, Armand Colin, 1963; Roselyne REY, *Naissance et développement du vitalisme en*

France de la deuxième moitié du XVIII<sup>e</sup> siècle à la fin du Premier Empire, Oxford, Voltaire Fondation, 2000; Michèle DUCHET, *Anthropologie et histoire au siècle des Lumières*, Paris, Albin Michel, 1971; Paul HOFFMANN, *La Femme dans la pensée des Lumières*, Paris, Ophrys, 1977; BUFON, *Œuvres*, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 2007, préface de Michel Delon, présenté par Stéphane Scmitz, Yvonne KNIBIEHLER, «Les médecins et "l'amour conjugal" au XIX<sup>e</sup> siècle», dans Paul VIALLANEIX et Jean EHRARD (dir.), *Aimer en France, 1760-1860*, Clermont-Ferrand, t. II, 1980, p. 357-366 et «Les médecins et la nature féminine au temps du code civil», *Annales ESC*, vol. 31, n° 4, 1976, p. 824-845; Thomas LAQUEUER, *La Fabrique du sexe. Essai sur le corps et le genre en Occident*, Paris, Gallimard, 1992; Francisco VASQUEZ GARCIA et Andres MORENO MENGIBAR, *Sexo y razón. Una genealogía de la morale sexual en España (siglos XVI-XX)*, Madrid, Akal, 1997.

全般的な話題については、Michel FOUCAULT, *Histoire de la sexualité*, Paris, Gallimard, t. I: *La volonté de savoir*, 1977.

(10) Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHES, *Histoire naturelle et la femme, suite d'un traité d'hygiène appliquée à son régime physique et moral aux différentes époques de la vie*, Paris, Duprat, Letellier, 1803.

Vireyについては、Julien Joseph VIREY, *De la femme sous ses rapports physiologique, moral et littéraire*, Paris, Crochard, 1825.

また、より遅い年代の女の文庫も参照しよう。機能にかんしては、F. BURDACH (1966), *Traité de physiologie considérée comme science d'observation*, avec des additions des professeurs Baer, Meyer, etc., Paris, J.-B.Baillière, 1837, note 2, p. 2. また「種に分離」についての註は、t. 1, p. 303. 市用したブルマン第一巻第三章45頁、《Des rapports de la sexualité avec l'organisme en général》と《Résumé des considérations sur la sexualité》に分かれてる。

(11) 薬を用ふ事と云ふ Julien Joseph VIREY, article «Sexe», *Dictionnaire des*

*sciences médicales*, Paris, Panckoucke, t. 51, 1821, p. 218-219.

(12) Pierre ROUSSEL, *Système physique et moral de la femme ou tableau philosophique de la constitution, de l'état organique, du tempérament, des mœurs et des fonctions propres au sexe*, Paris, Chez Vincent, 1775.

(13) *Ibid.*, p. 2.

(14) *Ibid.*, p. 7. 市用した著述については、トーマス圏内における平時の医学についての書や、Jean-Pierre Peter の全著作に基いてる。

(15) Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHES, *Histoire naturelle de la femme...*, op. cit., t. 1, p. 672. 著者は、1761年トーマスの著作のなかの頁や発題やページを (cf. *Histoire naturelle de l'homme*)。『トーマン作品集』が最近刊行されたおかげで、現在、以上の文献は容易に参照できるようになった。 *Œuvres de Buffon*, op. cit., p. 181-307.

(16) Pierre ROUSSEL, *Système physique et moral...*, op. cit., p. 80

(17) Léop. DESLABDES, *De l'omanisme et des autres abus vénériens considérés dans leurs rapports avec la santé*, Paris, Leclarge, 1835, p. 82.

(18) Pierre ROUSSEL, *Système physique et moral...*, op. cit., p. 82

(19) Pierre-Jean-Georges CABANIS, *Rapport du physique et du moral de l'homme*, 1771年、*l'homme* の長手本文を収めた1773年版 (Paris, Fortin, Masson) を使用して。両性の思春期の描像にわたる修正については、p. 203-226 を参照しよう。

(20) Adam RACIBORSKI, *De la puberté et de l'âge critique chez la femme: au point de vue physiologique, hygiénique et médical, et de la ponte périodique chez la femme et les mammanifères*, Paris, J.-B. Baillière, 1884.

(21) Alexandre-Jacques-François BRIERRE DE BOISMONT, *De la menstruation considérée dans ses rapports physiologiques et pathologiques*, Paris, Germer-Baillière, 1842.

(22) Pierre ROUSSEL, *Système physique et moral...*, op. cit., p. 81

(23) Léop. DESLABDES, *De l'omanisme...*, op. cit., p. 82.

(24) 女への愛の著者、Augustin-Pierre-Isidore POLINÈRE, *Essai*



- (96) C.F. BURDACH, *Traité de psychologie...* op. cit. t. 1, p. 352.
- (97) Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHES, *Histoire naturelle de la femme...* op. cit. p. 43.
- (98) Charles MENVILLE DE PONSAN, *Histoire philosophique...* op. cit. t. 1, p. 164. 同書を註する ADELON, *Physiologie de l'homme*, op. cit. t. IV, p. 44. 以下参照。
- (99) Adam RACIBORSKI, *De la puberté...* op. cit. p. 168. 著者は「次如」の「角張り」を「聲音を浴びせ」人類の肥育に人々の関心がかかることであると嘆息する (p. 168)
- (99) C.F. BURDACH, *Traité de psychologie...* op. cit. t. 1, p. 321.
- (19) けれど、彼等は Moreau de la Sarthes の著に返して我々の半腹を食せ。
- (92) Menville de Ponsan の前掲書に於ける力證を述べらる。
- (93) C.F. BURDACH, *Traité de psychologie...* op. cit. t. 1, p. 313.
- (94) けれど、註者によらずに、彼等は Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHES, *Histoire naturelle de la femme...* op. cit. p. 77.
- (95) 彼の半腹の味々を、この賦體者 Nicolas Philibert ADELON, *Physiologie de l'homme*, op. cit. t. IV, p. 45-51.
- (96) けれど、註者等は、我々の半腹を、この註者 Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHES, *Histoire naturelle de la femme...* op. cit. p. 113. へ Nicolas Philibert ADELON, *Physiologie de l'homme*, op. cit. t. IV, p. 45.
- (95) Charles MENVILLE DE PONSAN, *Histoire philosophique...* op. cit. t. 1, p. 161.
- (98) Pierre ROUSSEL, *Système physique et moral...* op. cit. p. 30.
- (98) Joseph CAPURON, *Traité des maladies des femmes depuis la puberté jusqu'à l'âge critique inclusivement*, Paris, Croullebois, 1817, p. 89.
- (92) Nicolas Philibert ADELON, *Physiologie de l'homme*, op. cit. t. IV, p. 51.
- (17) Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHES, *Histoire naturelle de la femme...* op. cit. p. 118-122.
- (92) Charles MENVILLE DE PONSAN, *Histoire philosophique...* op. cit. t. 1, p. 186.
- (92) Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHES, *Histoire naturelle de la femme...* op. cit. p. 81.
- (17) Georges BENESEKASSA, «L'article "jouissance" et l'idéologie érotique de Diderot», *Dix-huitième siècle*, n° 12, 1980, «représentations de la vie sexuelle», p. 9-34, *passim*.
- (92) 彼々の半腹を食せよ Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHES, *Histoire naturelle de la femme...* op. cit. p. 80. 同註者 Nicolas Philibert ADELON, *Physiologie de l'homme*, op. cit. t. IV, p. 45. 以下参照。
- (92) C.F. BURDACH, *Traité de psychologie...* op. cit. t. 1, p. 322.
- (17) Pierre ROUSSEL, *Système physique et moral...* op. cit. p. 83-84.
- (92) 彼々の半腹を食せよ COLOMBAT DE L'ISÈRE, *Traité complet des maladies des femmes...* op. cit. p. 84.
- (92) 彼への「擲紙」を、我々がよむ Pierre ROUSSEL, *Système physique et moral...* op. cit. p. 84.
- (92) *Ibid.*, p. 85.
- (92) Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHES, *Histoire naturelle de la femme...* op. cit. p. 408.
- (92) 彼への「擲紙」を、我々がよむ COLOMBAT DE L'ISÈRE, *Traité complet des maladies des femmes...* op. cit. p. 49, 51, 54.
- (92) Charles MENVILLE DE PONSAN, *Histoire philosophique...* op. cit. t. 1, p. 168.
- (92) Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHES, *Histoire naturelle de la femme...* op. cit. p. 72. BUFFON, *Œuvres*, op. cit. p. 236.
- (92) C.F. BURDACH, *Traité de psychologie...* op. cit. t. 1, p. 278.
- (92) Jacques Louis MOREAU DE LA SARTHES, *Histoire naturelle de la femme...* op. cit. p. 72.
- (92) C.F. BURDACH, *Traité de psychologie...* op. cit. t. 1, p. 307. 彼々の半腹を食せよ p. 308.

- (88) *Ibid.*, p. 309.
- (89) Joseph CAPURON, *Traité des maladies des femmes...* *op. cit.*, p. 8.
- (90) C.F. BURDACH, *Traité de psychologie...* *op. cit.*, t.1, p. 377.
- (16) Charles MENVILLE DE PONSAN, *Histoire philosophique...* *op. cit.*, t. 1, p. 201. 良識のある女性が最初の障害を越えたことによつてこゝちもる致命的な危険は、大変な当たりを取つたりチャードソンの小説『クラリッサ・ハーロウ』の主題である。
- (91) Alain CORBIN, Introduction à Parent-Duchâtelet (Alexandre), *La Prostitution à Paris au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Edition du Seuil, 《L'Univers historique》, 1981.